

第3章 杉並の空襲体験

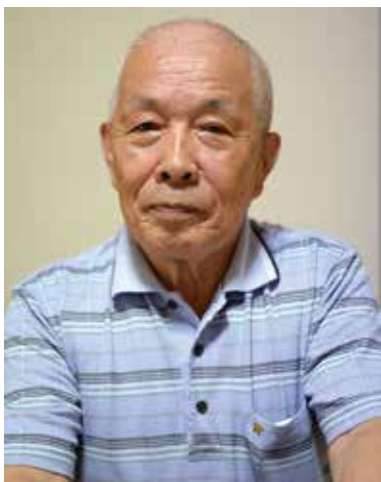
杉並の地にも悲惨な空襲が襲いかかった

全18回もの容赦ない攻撃により

杉並でも尊い命を亡くした方、大切な財産を奪われた方が
いることを忘れてはいけない

杉六小かしの木
昭和20(1945)年5月25日の空襲をうけたが、
今も生き続けている





家族を失った空襲

大熊 高明さん

昭和11(1936)年に久我山に生まれ。

8歳の冬と9歳の春、自宅で二度の空襲に遭う。空襲で母と次兄、弟妹を亡くし、父と長兄との暮らしになる。

高校卒業後は家業のリサイクル業に就き、60年間にわたって従事。

父の立ち上げた会社を、兄に続いて3代目として引き継いだ。

■ 家の前に落ちた爆弾

昭和19(1944)年12月3日、アメリカのB29(参照▶P20)爆撃機から250キログラムの爆弾が2発、投下されました。1発は高井戸第二国民学校(現・高井戸第二小学校)の南側の松村先生宅に、もう1発は小学校西側の大熊音次郎(私の父)の住宅前の畑に落ちて、爆発しました。

当日はちょうど日曜日でした。父は久我山警防団(参照▶P20)の職務で外出しており、私たち残りの家族は全員家にいました。私は8歳、高井戸第二国民学校の2年生でした。正午過ぎごろ、空襲警報(参照▶P20)のサイレンが鳴り、家にいる私たちは防空壕(参照▶P20)に入りました。防空壕は庭先があり、周りには古畳を、上には電車の枕木を乗せて作ったものでした。このとき、私の父は警防団で久我山駅にて電車の乗客の避難誘導をしていたそうです。

防空壕に入ってまもなく、ゴォーツというものすごい音がして、急に体が動かなくなり、あとは分かりませんでした。爆発のために防空壕は壊れ、中に入っていた私たち5人は生き埋めになってしまいました。私は防空壕の一番奥にいたため、幸い助かりましたが、他の母と次兄、弟妹は皆亡くなりました。とば口(註)にいた長兄は自力で這い出して助かりました。

■ 近所の人に助けられる

埋まっていた私は、隣組の人たちによって掘り起こされ、近隣の飯田さん宅に担架で運ばれました。当時久我山稲荷神社近くに住んでいた医者佐竹先生に人工呼吸をしていただき、翌日に気がついたとのこと。後から聞いた話ですが、私の隣のうちでも防空壕に逃げたのですが、顔が出ていたので助けを呼ぶことができ、隣組でそちらから先に掘り起こしたそうです。うちは完全に埋まっていたので、掘るのが後になったのです。飯田さんの家から帰ってきて、初めて爆弾の落ちた後を見ました。深いすり鉢状の穴で、周りに霜柱が10センチメートルほど立っていたことを覚えています。

父から聞いた話では、家族の遺体は軍隊がトラックに乗せていき、後日遺骨を取りに行ったそうです。まとめて焼いているんでしょから、どの骨が完全にうちの家族のものとは限らないでしょう。

■ 疎開帰りの機銃掃射と、2度目の空襲

その後、私は宮城県栗原郡若柳町迫(はざま)の旅館に学童疎開をしましたが、2か月ほどで父が迎えに来て、皆より先に東京に戻ることになりました。東京に戻る途中、宇都宮の駅でアメリカ軍のP51による機銃掃射攻撃を受けました。乗客は座席の下にもぐって難を逃れました。

昭和20(1945)年4月7日、再び私は東京の自宅で、空襲警報のため防空壕に避難していました。防空壕は、家の前の道路の向こう側に、隣組で新しく作ってくれていました。そのとき、アメリカのB29爆撃機が撃墜され、自宅近くに墜落しました。ドスンという衝撃があり、電線が波打っていました。爆撃機は爆弾を5発搭載していましたが、墜落後に破裂しなかったために、私たちは無事でした。自宅から100メートルほど離れた辺りでは家屋が3軒ほど焼け、おばあさんがひとり亡くなりました。

飛行機はすぐに回収されましたが、爆弾は終戦後も3年ほど広場に放置されていました。信管は抜かれており、私たちはそこに乗っかったりして遊んだものです。

私たちの戦時中は食べ物がなく、大変な時代でした。配給はイモばかりで、いまでもサツマイモを見ると、当時を思い出して苦手に思います。高井戸第二国民学校は軍隊が使用していたために、学校に行くことができず、何か月か井の頭の明星学園に通った記憶があります。

註 とば口: 出入り口



高井戸の空襲、庭先にも着弾

江藤 雪子さん

昭和6(1931)年、高井戸町上高井戸(現・高井戸東一丁目)に生まれる。

昭和18(1943)年、高井戸国民学校卒業後、東京府立第十五高等女学校(現在の都立神代高校)に進学。

在学中の昭和19(1944)年4月から翌年7月にかけて、女子学徒動員で府中市の東芝工場に通う。

昭和20(1945)年5月、自宅で空襲を経験。

■ 過酷な学徒動員の日々

70年前、世界を相手に無謀な戦いを挑んだ日本は、昭和20(1945)年3月10日の東京大空襲の後、連日、空襲(参照▶P18)にさらされていた。はじめは、まず警戒警報のサイレンが鳴り響き、防空頭巾(参照▶P17)をかぶり最小限の荷物を肩に防空壕(参照▶P20)にもぐりこむ。次いで空襲警報(参照▶P20)が響きわたり、頭上にB29(参照▶P20)の爆音が近づいてくる。そのまま通り過ぎ、ほっと一息で穴から這い出す日も多かった。しかし、戦況の悪化とともに、国内の軍事施設も次第に破壊され、敵機の襲来を感知する機能は失われた。何の前触れもなく、B29が頭上に飛来し、超低空で機銃掃射をして飛び去る。ニヤリと笑っているような飛行士の顔を忘れることはできない。

昼夜を分かたず訪れる米軍機にいつやられてしまうか知れない日々の中、私は女子学徒動員(参照▶P20)で、毎日、上高井戸(現・高井戸東一丁目)の自宅から電車で府中市の東芝工場に通い、特殊潜水艇のモーターを作っていた。まだ13歳から14歳の少女が、ぎゅうぎゅう詰めでドアが閉まらない京王線の手すりに必死にすがりついて通勤し、一日中くたくたになるほど働いた揚句、いざ帰途に就くと空襲のため電車が動かないということが何度もあった。歩いても歩いてもわが家は遙かに遠く、途中で何度も敵機の襲来に出会う。道端に掘られた防空壕に入れてもらって敵機をやり過ぎし、静かになると、お礼を言って外に出てまた歩き出した。

ある日、くたくたに疲れ切って夜道を歩いていると、大根を載せたトラックが横で止まって、もうすぐ家というところまで乗せてもらえた時のうれしさは、70年経っても決して忘れることはできない。

■ 庭先に落ちた50キログラム不発弾

またある夜中、ドシンという大きな音とともに、窓ガラスがガタガタと音をたてた。びっくりして跳ね起きたが、それっきり何

の音もない。懐中電灯をつけ、抜き足差し足、玄関の戸をそつと開けてみると、何やら黒い大きな塊が転がっている。真っ暗なので確認のしようもなく、しばらく眺めていたが、あきらめてその夜は就寝し、翌日、調べてもらったところ、50キログラム焼夷弾(参照▶P20)の不発弾で、信管を抜かなければ、いつ爆発するかわからないとのことだった。「いずれ処理できる人間に来てもらうが、それまで近寄らないように」との指示だった。それから1か月あまりの間、一抱えもある大きな爆弾の存在におびえて暮らす日が続いた。玄関から門までロープを張って近寄れないようにし、裏の勝手口から隣の家を通って出入りした。毎夜、床に入ると「ひょっとして私たちは夜中に家ごと爆破されて、明日はこの世にいないかもしれない」と不安になり、亡き父に「どうぞ私たち3人をお守りください」と祈って眠る日々が、不発弾の処理班が来るまで続いた。

■ 高井戸を襲った大空襲

昭和20(1945)年5月25日、高井戸には雨霞(あめあられ)と焼夷弾が落とされ、田畑に原っぱ、杉林や松林などの間に、ぼつりぼつりと人家があるだけの純農村にすぎないのに、30数軒の炎上被害があったと聞いた。その後、拾い集められた焼夷弾の残骸(直径10センチメートル、長さ50センチメートルぐらいだろうか、円筒形の金属だったように思う)が、原っぱにうず高く積み上げられているのを見た。

わが家は畑地の中に数軒固まって建っている中にあり、いざという時逃げるのは難しいので、警報が鳴ると妹を連れて一軒おいた叔母の家の防空壕に避難した。父を早く亡くしたわが家は、母が一人、火たたき(参照▶P18)棒なる物を持ち、仁王立ちで玄関前に立っていた。義理の叔父は、当時としては貴重な国内に残る男性だったわけだが、警防団員として出勤していて家にはいない。庭の隅に掘られた防空壕の一番奥に当時3歳の叔母の長男、その前に小学3年生の妹、高等女学校3年の私、最前列に水を入れたバケツの把(つか)を握った叔



灯火管制時に使用した電球と笠。電球に不透色が塗られ、発光制限がされている（杉並区立郷土博物館蔵）

母。この4人が息をひそめて壕の中にいる。…とドシンと大きな音がして壕が揺れ、みんな尻餅をついて倒れてしまった。すぐ起き上がった叔母が外をのぞき「落ちた!」と大声で叫んでバケツ片手に飛び出していった。

私は幼い2人に、「大丈夫、ここを動かないのよ」と言い置いて、外へ飛び出し、井戸の脇からバケツを持って走った。幸い爆弾は、軒先3メートルぐらい先の畑に落ち、葉っぱがめらめらと燃えていた。隣近所の人たちもバケツを持ってかけ集まり、畑の火は、あっという間に消し止められた。あとちょっと家の方に寄って落ちていたら、叔母の家は跡形もなく燃え落ちたことだろう。幸運としか言いようのない出来事だった。

■ 自決の覚悟で聞いた玉音放送

終戦間際になると、わが家の地続きにあった松林に小さなテントが張られ、兵隊が何人か来て、ふた抱えもあるような松の木を伐り倒した。根を掘り出して松根油をしぼり、軍用機の燃料にするという。小さい時から忠君愛国を叩きこまれた愛国少女であっても、日本は、もう終わりだなと思わざるを得なかった。昭和20(1945)年、8月15日正午。重大放送があると言う。日本は負けて、米兵が続々と上陸してくる。女たちは何をされるか分からないから身を隠せとささやかれていた。わが家は女3人暮らし。そんな状況になったら、とても生きてはい

られないだろう。幼い妹はともかく、母と私は覚悟を決めた。

15日正午前、身なりを整え、ラジオを囲んで3人で座った。しかし、おんぼろラジオは、ガーガーというばかりで天皇陛下のお言葉なるものは、よく聞き取れない。母と私は、ひざ前に短刀を置き、敗戦、米軍上陸と決まったら自決する覚悟だったのだが、よくわからないうちに「玉音放送(参照▶P20)」は終わった。緊張しきっていただけに、しばらくは声もなく、ただボーっとしていた。そのあとの記憶はほとんどない。短刀を使う時が無かったのは確かだ。

戦争が終わり、満州(現在の中国東北部)に出征していた母の弟は終戦まで生きていたのに、シベリアで抑留されて命を落とした。数年後、氏名を記した紙切れ1枚が入った骨壺を渡されて終わり、大事な跡取り息子を失った年寄りと女子どもだけ残された一家の苦労の日々が始まった。戦後70年経つが、その傷跡は、今だに癒えない。

人は言葉を持っている。考える力を備えている。武力によらず、相手の考えを聞き、自分の意見を述べることで、どんな困難な場面でも根気強く解決の道を探る努力をする。それが、識者に劣化したと言われながらも非戦を貫いて、諸国の信頼を得られるようになってきた日本が進むべき、唯一の道なのではないか。日本人だからできたと言われるような、言葉を大切に外交によって、国際関係を良好なものにしていくことができれば、どんなに幸せなことだろうと思う。



一消防官の回想 (B29からマッカーサーまで)

原田 弘さん

昭和2(1927)年、杉並区生まれ。日大三商卒業。昭和19(1944)年、18歳で警視庁消防部に採用され、杉並消防署に配属。昭和20(1945)年5月25日の空襲では両親と暮らしていた旧高円寺三丁目の自宅も焼失した。

終戦後、昭和20(1945)年9月、警視庁警察官へ転官、表町署(現・赤坂署)に勤務。

昭和24(1949)年、警視庁より「MP同乗警察官」として派遣され、10年間勤める(途中、中断あり)。

以後、40余年間勤務し、昭和60(1985)年退職。現在88歳。杉並郷土史会名誉会長。

著書に『MPのジープから見た占領下の東京 同乗警察官の観察記』などがある。

私が年少消防官として杉並消防署に配置されたのが、昭和19(1944)年3月のことで、毎日、警防係員として区内各町会の隣組防空群(註1)の訓練指導へ先輩と行きました。火たたき(参照▶P18)、とび口(註2)、砂、防火用水など点検し、群長や班長等と懇談するなど防火意識の高揚に当たりました。この頃は、まだ空襲(参照▶P18)の実感もわからず、B29(参照▶P20)を見たこともありません。バケツリレーなど梯子を使って消止められるぐらいにしか思っていませんでした。

しかし、やがて年少消防官として東北方面の青年が動員され、秋田、山形、福島などから消防車が供出されるなど、戦時体制となりました。19年も後半になる頃から、B29による偵察行動に続いて本格的空襲となりました。B29の腹に響くような爆音は、戦後になっても忘れられません。

杉並警察署の屋上では杉並防空監視哨(かんししょう)が昼夜監視して、敵機発見に当たっていました。区役所屋上には全区に鳴り渡る大型のサイレンが置かれ、警戒警報、空襲警報(参照▶P20)で区民に知らせていました。サイレンが鳴る時、「シュシュ」と10秒くらい音がして、その後、本当に警報が出ました。すると、各地区から警防団員(参照▶P20)が緑色の制服を着て、特別消防の組は消防署へ、特別警察の組は警察へ参集しました。

また、杉並消防署には第一高等学校(現・東京大学教養学部)の学徒動員の生徒も派遣されていました。平素は教官の巡回授業などを受けておりましたが、ポンプ操法の訓練や、望楼勤務(註3)なども一般署員と共に行いました。神田の火災現場の応援出場にも緑の刺子(さしこ)を着て活躍していました。

■ 空襲の被害調査

私は警防係の被害調査班も務めていたので、空襲が終わると被害調査に向かいました。荻窪地区が多く、大部分が爆弾による被害でした。当時、西武線の北側は水田が広がっており、そのため、すり鉢を大きくしたような穴ができていました。



旧高円寺三丁目隣組防空群の様子

調査といっても、ただ聞けばよいということではなく、相手のことも考えねばなりません。ここで私の失敗の一つですが、爆死してしまった夫婦の身元を調べるため、被害地の近くの家に聞き込みに行った時です。亡くなった人の名前を聞きますと、その家人が黙って私の帽子を突くので顔を上げると、口に指で「静かに」と合図して「実は亡くなった人の娘さんが帰宅して、隣の部屋にいます。死亡は知らせていません」。私はハッと気がつき、急いで「すみません」と外へ出ました。これは西荻窪駅の東で、線路に近い住宅地でした。

■ 炎熱地獄となった下町の大空襲

空襲は、昼は爆弾、夜は焼夷弾(参照▶P20)と決まっておりました。また、アメリカは日本の記念日をよく狙っていました。昭和20(1945)年3月10日の下町大空襲で炎熱地獄を出現した日は、陸軍記念日でした。

杉並はこの日、被害がなく、応援出場の命が出ました。消防車で麴町から半蔵門を左へ曲がると、反対の方から近衛兵の一団が馬を連れてしずしずと避難してくるのと遭遇し、馬が驚くから消防車のサイレンを止めるよう要請がありました。その後、市ヶ谷へ抜けると、至る所が燃えていて、どこから手をつけ



左から『家庭防火群指導要領草案』、『防空必勝の策』、『家庭防火群組織要綱』

ていかわかりません。水をかけるにも全ての消火栓を使っているため水圧がありません。それでもなんとか消火活動をしているうちに夜が明けました。

■ 杉並の空襲

杉並区内での最も大きな空襲は昭和20(1945)年5月24日と続いて25日で、24日は杉十小などが焼けました。学校は煙突を横にしたようなものなので、火のまわりも早かったです。現在の梅里一丁目、西方寺入り口付近にあった橋市場とその後ろの塩野乾物店も焼け、逃げようとしたおかみさんは、子どもを背負ったまま入り口で倒れ、焼死していました。

次の25日は山手最後の大空襲で、高円寺、堀ノ内、方南町、和泉町、永福町、和田本町などに甚大な被害を受けてしまいました。木造家屋は輻射熱で乾燥しているため火が移るのも早く、消火活動といってもなにもできません。1軒の家が焼けるのに5分もかからず、焼け跡には柱一本残りませんでした。

石田署長は応援の要請を消防部長に出すのに、連絡も通信網も不通になってしまい、しかたなく署員の中から市村消防手を警視庁(桜田門)へ連絡に向かわせました。彼は自転車で猛火の中を走り、ようやく本庁にたどり着き、消防部長に直接、署長の伝言を伝えましたが、消防部長は「ご覧の通り、各所共手一杯だ。余力はないから自分のところでやってくれと署長に伝

えてくれ」と応援は受けられない状態でした。

■ 消防官から警察官へ

8月15日、この日は朝からラジオで、正午から天皇陛下の玉音放送があるのでスイッチを切らないようにとのこと。正午、全署員が2階事務室に集合、玉音放送(参照▶P20)を聞きました。その中で「ポツダム宣言を受諾し」というくだりを聞いて、私は声を上げて「負けた」と叫んでしまいました。しかし、誰も無口で、署長もうつむいたまま、署長室に入ってしまいました。この時の「君が代」の淋しい、悲しい気持ちは忘れられません。窓から区役所の方を見ますと、人っ子一人通らない、白昼の街とはとても思えませんでした。

この日から数日後、軍隊なき後の治安の重要性から、消防官230余名が警察官として転属となり、私は終戦降伏調印の翌日、警察官となりました。驚くことに、配置先は今まで「出て来い、ニミツ、マッカーサー、出て来りゃ地獄へ逆落とし」と歌った、あのマッカーサー元帥の身辺警護隊として、大使館大使公邸へ。敬礼する警察官にいちいち正しく、答礼する元帥に複雑な気持ちになりました。



警察官への任命書

註1 隣組防空群:町内の防空演習は隣組を単位として組織的に行われ、灯火管制、警報の伝達、防毒、家庭応急消防などにあたった。

註2 とび口:長い柄の先に鶯のくちばしのような鉄製の鋭い鉤(かぎ)を付けた道具。木を引き寄せたり、消火作業などに用いる。

註3 望楼:ものみやぐら。火事がないかなど24時間監視していた。